

37 神経心理学的検査の結果から見た高次脳機能障害患者の傾向

—クモ膜下出血と外傷性脳損傷を中心に—

医療相談開発部 心理 松井健太・四ノ宮美恵子・土屋和子・色井香織
岡部怜子・石原奈保子・富岡純子・小早川睦貴

1. 目的

当院心理で脳損傷により神経心理学的検査を受ける患者の疾患は多岐にわたり、それぞれの疾患で臨床像も様々である。中でも、クモ膜下出血患者（以下「SAH」）と外傷性脳損傷患者（以下「TBI」）の臨床像においては、臨床場面から質的な相違に気づかされることが多い。

そのため、本発表では、先ず SAH と TBI の臨床像の一部である認知面、特に知的機能・記憶機能の特徴について検討することを目的とし、神経心理学的検査の結果を比較分析した。

2. 方法

WAIS-R・リバーミード行動記憶検査（以下「RBMT」）の検査結果による分析

対象：下記①～④の条件を満たす患者計 35 名（SAH 群：13 名、TBI 群：22 名）

①2004 年 11 月～2006 年 10 月に当院入院 ②年齢 35～65 歳 ③診断名が「クモ膜下出血」あるいは「外傷性脳損傷」 ④WAIS-R の全検査と RBMT を実施可能

分析：SAH 群、TBI 群の 2 群において、WAIS-R の VIQ、PIQ、FIQ、11 下位検査、RBMT の標準プロフィール得点の各々を t 検定にかけ、群間比較を行った。

3. 結果

Levene の等分散性検定でいずれも等分散性が認められなかったため、等分散を仮定しない t 検定を行った結果、SAH 群は TBI 群よりも WAIS-R の「数唱($t = -2.363, p < .05$)」で有意に得点が高く、TBI 群は SAH 群よりも WAIS-R の「組合せ($t = 1.784, p < .10$)」で有意に得点が高い傾向にあった。その他の項目では、有意差は認められなかった。

4. 考察

「数唱」は、言語的に呈示された数字を復唱・逆唱する課題であり、言われたことを繰り返す、あるいは逆から言う比較的単純な情報処理を要す。一方、「組合せ」は、視覚的に呈示されたパズルの断片を元に全体を予想しながら形を作成していく課題で、与えられた断片の形態や模様をヒントに全体を推理し照合する複合的な情報処理を要す。このことを踏まえると、「SAH 群は TBI 群よりも何をどうするべきかや正誤が明確な課題に取り組みやすい」傾向があり、逆に、「TBI 群は SAH 群よりも何をどうしたらいいのかを自分で考えて遂行する課題に取り組みやすい」傾向があると思われる。

5. 展望

本稿では、神経心理学的検査の結果から SAH 群と TBI 群の違いについて明らかにした。今後は、病識変化の様相の違いを加味して、臨床場面において経験される両群の質的な相違を明らかにすべく分析を行い、リハビリテーションの方略への検討につなげていきたい。